

【講演記録】

三島中洲における漢洋折衷のバランス感覚

—松陰・安繹・栄一との比較—

陶 徳民

この度、町泉寿郎先生のご厚意によりご報告の機会をいただき、誠にありがとうございます。

三島中洲（一八三一—一九一九）については、前から親しくしていた戸川芳郎先生と故中村義先生などの先行研究『三島中洲の学芸とその生涯』（雄山閣出版）や関連文献に触発されて、強い関心をもっています。たとえば、幕末の大儒塩谷宕陰の門人で、重野安繹、久米邦武と共に明治期の実証主義史学に大きく貢献した星野恒という東大教授がいました。一九〇〇年、彼は中洲の古希を祝賀するために書いた「中洲三島君七十壽序」の中で、中洲はただ単に漢学や作詩作文に長じているだけでなく、経済・財政・法律などにも詳しい類まれな学者だと称えました。そして、中洲のように漢学者も洋学を、また洋学者も漢学を勉強しなければならず、「漢洋並進」（漢学・洋学並んで進む）を図るべしと説いていました。本報告のテーマ中の「漢洋折衷」は、この星野の主張の趣意を違う言葉で表現したのですが、妥当かどうかいささか不安もありました。先ほど町先生に聞いてみたら、明治時代以前の文献の中に「漢蘭折衷」、つまり漢学と蘭学の折衷という用例がすでにあったと教えてくれたので、安心しました。

今日は、これまで研究したことのある三人の人物、すなわち吉田松陰（一八三〇—一八五九）・重野安繹（一八二七—一九一〇）・洪沢栄一（一八四〇—一九三一）という三者との比較を通じて中洲の学問の特質を浮き彫りにしたいと思います。一般的に言いますと、外来文明の摂取は、たいてい器物・制度・思想という三段階の受容過程を辿ります。最初は「器

Log of United States Steamer <i>Powhatan</i> , Commanded by Capt. J. H. McNeill						Remarks on this Day of <i>Apr 25 1854</i>
Date	Particulars	Course	Wind	Weather	Temperature	
			Direction	Force	At Sea Under Way Anchored	
			S 1/2 W	3	6	<i>Commenced at 1 1/2 hrs Japanese</i> <i>came on board in a small boat,</i> <i>getting aboard their Boat for water</i> <i>& they were rowed ashore in the</i> <i>Boat of the Emma.</i>
	<i>Calm</i>		0	0	54 62	<i>From S 1/2 E, 1 1/2 mi S, 1/2 mi E, 1/2 mi S</i> <i>4 1/2 hrs Lexington for Coal, Cleared Graves</i>
	<i>Brk</i>		4	80	56 62	<i>From S 1/2 E, 1 1/2 mi S, 1/2 mi E, 1/2 mi S</i> <i>From S 1/2 E, 1 1/2 mi S, 1/2 mi E, 1/2 mi S</i>
	<i>Sy 11.</i>				60 60	<i>Made gen S 1/2 E, 1/2 mi S, 1/2 mi E</i> <i>called all hands to muster</i>

ペリーの旗艦ポーハタン号の航海日誌における松陰の乗船記録 (1854年4月25日) アメリカ国立公文書館所蔵

物」、とくに艦船や銃砲といった優れた物に凝縮している「技術」を習います。第二段階は「制度」、すなわち仕組み・きまりとその背景としての「学術」を学びます。たとえば、新しい法制度を形成させるためには当然、法学の知識が必要となります。第三段階は「思想」、つまり理念や考え方ですが、私はここで「心術」という心の持ち方を表現する言葉を使ってみてみたいと思います。倫理学でいう「心術」は、「行為が発したり動機が生じたりするもとななる意志の持続的な性向」というものです。

中洲の一生もある意味でこの三段階を経験しました。今日の報告は、中洲の経験した三段階について、同時代人の松陰、安齋、栄一を順次取り上げてお話しを進めてゆきたいと思っています。

(一)「黒船」探索に現れた実学精神——吉田松陰との比較——

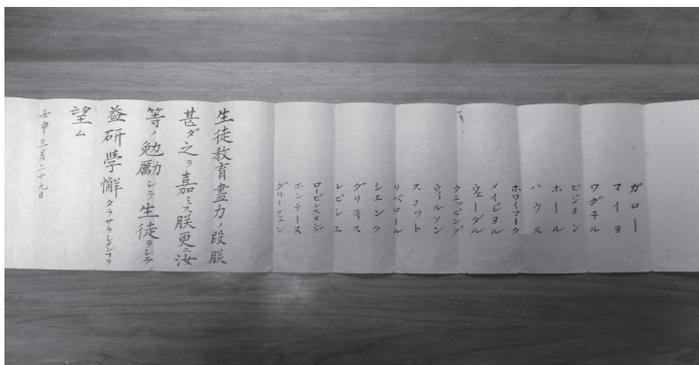
ペリー来航が幕末の日本にもたらした衝撃はいかに大きいものであったか、当時の松陰と中洲の観測記録からも分かります。一回目の来航は一八五三年であり、同年七月十一日(旧暦六月六日)、浦賀に駆けつけた松陰は、師の佐久間象山が現地 で雇った飛脚便に頼んで、江戸にいる長州藩の砲術家道家龍助に一書を寄せ、次のように黒船の様子を報じました。「今朝高処に登り、賊船の様子を相窺ひ候処、四艘(二艘は蒸気船、砲二十門余、船長四十間許り、二艘はコルベット、砲二十六門、長さ二十四五間許り)、陸を離れること十町以内の処に繫泊し、船の間相距ること五町程なり。(中略)然るに此の方の台場筒数も甚だ寡く、徒らに切歯のみ。(中略)孰れ交兵に及ぶべきか。併し船も砲も敵せず、勝算甚だ少なく候」と。

ペリーの二回目の来航は一八五四年でありました。同年三月一日（旧暦二月三日）の早朝、保土ヶ谷の宿から出発した中洲は、神奈川沖に駆けつけた。「茶屋に上り、望遠鏡を出して望むと、七艘が艦を北に向け、軸を南にして列になって碇泊していた。そのうちの三隻は大輪大軍艦で、一隻は大軍艦であり、三隻は將軍艦で、大きいものは四十尋前後であり、小さなものでも二十尋を下らず、横は長さの五分の一であり、水から出しているところは、二、三尋もあるであろう。水中にあるのは幾尋かわからぬ。檣は四本で、高さは六、七尋あり、立っているのが三本あり、高さ二、三尋である。また艦頭に傾いている一本あり、帆づながこれに纏っており、縦横蜘蛛網である。両側には砲眼が点々と星のようにあり、数えることができる。船板はみな黒く塗っており、あるいは左右に一条の白、または朱線が引いてある」と記録しました。のちにこの日の日記を含む『探辺日録』が出版されました。

この二つの記録から、松陰も松陰より一歳年下の中洲もすぐれた探索者であり、黒船の形状やサイズを、できるだけ正確に把握しようとしていたことが分かります。松陰は書いていませんでしたが、おそらく中洲と同じように、目盛りのついている望遠鏡を使って観測していたでしょう。それはともかく、両者ともに入念に黒船の寸法をこの目で実測していたことに変わりはありません。

しかし、忘れてはいけないのは、当時の日本と欧米は、まったく違う物差しを使い、別箇の度量衡制を取っていた、ということです。実は三か月前に、アメリカ諸大学へのレクチャー・ツアのついでにラトガース大学図書館のグリフィス文庫を訪ねました。それは、阪大留学時代以来の恩師の一人で今年九四歳の梅溪昇先生のお勧めで行ったのですが、同文庫の貴重さを実感できました。¹

1 梅溪先生は『お雇い外国人―明治日本の脇役たち』（日経新書、一九六五年）をはじめ著書を多数出版した。その最新作の『お雇い外国人調査記録―グリフィス・アンケートへの回答』（青史出版、二〇一四年）は、一九〇一年グリフィスが一八五八年―一九〇〇年の間に日本で働いていたお雇い外国人およびその家族に対して行なったアンケート調査の結果をまとめたものである。



お雇い外国人教師を励ます明治天皇の詔書（1872）ラトガース大学
グリフィス文庫所蔵

ウイリアム・エリオット・グリフィス（一八四三—一九二八）は、最初は福井県、のちに東大前身の大学南校に務めたお雇い教師で、その蔵書の一冊として開成学校が出版した『日本・英・仏 度量比較表』があり、そこに、日本の尺・間・町・里とフランスのメートル、英米のヤードなどとの換算数値表が詳しく載っています。そのほか、お雇い外国人教師を励ます明治天皇の詔書や、大臣が署名したお雇いとの契約書などもあります。このような実物を見たことで、幕末明治初期の人々が西洋文明を取り入れるためにどれほど苦心惨憺していたかよく分かります。

度量衡制だけでなく、時間の制度も完全に違っていました。たとえば、松陰は下田密航の時、米艦側の人々と時間の認識も異なっていて約束が取れないため、自分が火を燃やすから、それを見たらすぐに迎えに来てくれ、という依頼文書まで書いた。結局、仕方がなく、弁天島付近の伝馬船を無断借用して黒船に向かったのです。その『回顧録』に、ペリーの旗艦ポーハタン号の艦上で尋問を受けた時は、「七ツ時」だったと書かれています。西洋の時間でいつたい何時何分に当たるか分かりません。

二〇〇九年春、アメリカ諸大学へのレクチャー・ツアのついでに首都ワシントンにあるアメリカ国立公文書館を訪ねました。驚くことにポーハタン号の航海日誌に「二人の日本人」の艦上滞在時間が詳細に記録され、午前二時四五分に上船、四五分後に降ろされたという始末です。この史料発見は、密航日から数えてちょうど一五〇年後の同日にあたる二〇〇九年四月二五日の『毎日新聞』に報じられました。今年の大河ドラマ「花燃ゆ」が一月四日に始まりましたが、その前日の深夜にNHKの新春スペシャル「世界へGO まるわかり幕末長州」という導入番組が放送され、その中にこの発見も取材者の現地調査の形で再現されました。



東京大学古典講習科漢書課前期の卒業記念写真（1887年7月9日）
前列の右より2人目は重野、6人目は三島、二列目の2人目は中村。

町先生が編纂した三冊の図録『三島中洲と近代』に、中洲の対外認識を反映するいくつかの筆記や論説が紹介されている。たとえば、中洲は松陰のように箕作省吾著の世界地理書『坤輿図識』（一八四七年刊）に強い関心を持ち、二十歳前後の松山修学時代に書中の人物略伝を抜粋抄出していること、また先に触れた一八五四年春の黒船探索で横浜周辺において下田密航前の松陰と相識していること、一八六〇年昌平坂学問所再遊の時に、商売従事の邦人が官有物の新造「巨艦」を賃貸して航海貿易を展開すべしと主張する「交易策」を同学問所の教授中村敬宇に訂正を求めたことなどです。このような開国

進取の思想をもっていたからこそ、藩校有終館の学頭を務めた時に「孔孟ノ道義二本ツキ、西洋ノ學術ヲ兼採ス」という学制改革の方針を掲げ、また明治維新直前の一八六七年に藩の洋学総裁を任命されたのでしよう。

（二）漢学を素地とした洋学受容―重野安繹との比較

中洲が松山藩の洋学総裁に任命された一八六七年に、今日取り上げる三人の比較対象人物は、安政の大獄で亡くなった松陰を除いて、みな大活躍していました。中洲より三歳年上の重野安繹は『万国公法』の和訳に着手し、明治三年薩摩藩の資金で出版しました。薩英戦争後の平和交渉に参加したことで西洋の国際法を知らねばならぬと痛感したからでしょう。一方、渋沢栄一は最後の將軍徳川慶喜の弟昭武を团长とするパリ万博派遣使節団の会計係として、ヨーロッパの銀行や

会社など近代の経済機構を見習っていました。もちろん、パリ万博には幕府だけでなく、薩摩藩も代表团を出していました。団の名義をめぐる交渉の結果、幕府が派遣したのは大君政府の代表团、薩摩藩が派遣したのは薩摩太守の代表团となりました。

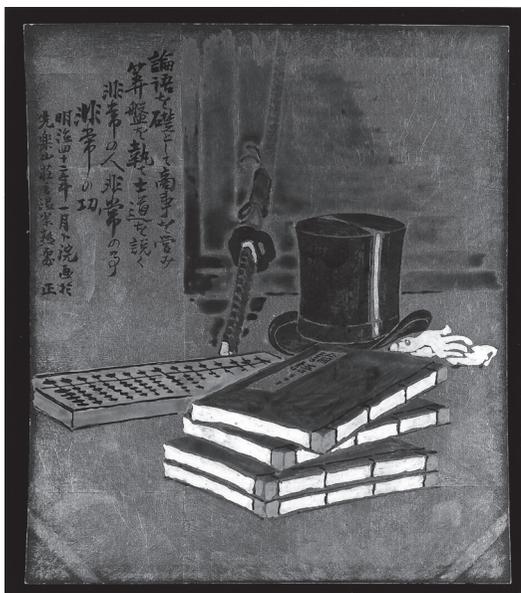
それから、先ほど触れた中村敬宇は一八六七年に、ロンドンで一三人の少年留学生を引率・監督していました。確かに阪大留学中のことだったと覚えていますが、ロンドン滞在中の敬宇は、朝四時に起きて四書を読んでいたことに言及したある研究書に接した時、私は深い感銘を受けました。西洋の中心部ともいえるロンドンにいた幕末の日本人が論語・孟子・大学・中庸など中国儒教の古典を読んでいるという光景は、私にとって想像を絶するほど面白さがありました。またイギリスでキリスト教の影響を受けたため、帰国後の敬宇は明治初期において、天皇が率先して受洗された方が望ましい、なぜならば、西洋文明の物質面のみを受容し精神面の受容がなければ、人は目の回らない人形になってしまうからと説いた匿名文章を新聞に寄稿しました。これはまた、私に衝撃を与えました。しかし、まさにこの同じ敬宇は、漢学が洋学受容の不可欠な基礎教養だと、自らの経験や少年留学生の成長経歴などを事例に「漢学不可廢論」を強調したのです。その理由の一つとして、中国の古典に極めて豊富な語彙が有るので、難しい西洋のタームや概念を翻訳するのに便利だということが挙げられています。

のちに敬宇は、中洲と安齋とともに、漢学の衰退を食い止めるために設けられた東京大学古典講習科漢書課の教授となりました。それまで、中洲は明治政府から司法省七等出仕の徵命を受け、新治地方や東京の裁判官や大審院の判事などを務め、お雇い外国人ボアソナードなどの講義を受けてフランス民法を学びました。その聴講ノートに、人権・物権・動産・不動産・所有権・物件所在地・裁判所・契約など、今でも生きている日本的に新造・改造された漢語が並んでいます。中国では、これらの民法概念が一九〇八年の『大清律草案』や一九二九年の『中華民國民法』に日本経由で取り入れられたのですが、一九四九年革命後の中華人民共和国では「ブルジョアの法権」観念と批判され、排除されました。共産主義イデオロ

ギーでは、私有財産は「万悪の根源」で、宗教は「人民を毒害する阿片」だとされていたからです。一九七九年に始まった改革開放の後、一九九九年になって「契約法」（中国語では「合同法」）がようやくでき、二〇〇七年になって「物権法」がかりうじて成立しました。後者は、もし『大清民律草案』ができた一九〇八年から数えるならば、ほぼ百年かかっていた復活となります。

中洲がフランス民法の導入に一役を買ったのに対し、安繹はドイツのランケ史学の導入に重要な役割を果たしました。すなわち東大史学科教授の安繹は同じ学科のお雇い外国人教師でランケのお弟子であるリースの助言を聞き入れて、史学会を創設すると同時に会誌の『史学雑誌』を発行し、実証主義史学を提唱しました。これは相当有名な話となっていますが、しかし、その英仏法学導入に関する建白についてはあまり知られていないようです。今年三月に、『重野安繹における外交・漢文・国史―大阪大学懐徳堂文庫西村天囚旧蔵写本三種』を出したのですが、写本の第一種は『横濱應接記』という、生麦事件に起因する薩英戦争の終結後に行われた和平交渉の実録です。おそらくその時に得た教訓でしょうが、安繹は『和訳万国公法』を出版したのち、「文部中業生英仏に派遣し法律を修めしむるべき旨意見書」を起草しました。その理由として、「律ノ学ハ深奥高尚所ナノデ能尽ス所ニ非ズ、請フ速ニ文部中業生専門科入ル可キ者十許名ヲ選ミ、英仏等ノ国ニ赴キ有名ナ法師ニ多年従学シ、必ズ免許状ヲ得ルヲ期シ、帰朝ノ後立法行政ノ官員ニ補セラレハ、国律一定動ズ、万国交道其宜ヲ得、大小並立ノ実効相顕可申奉存候事」と述べています。

ただし、安繹は漢学と洋学のバランスをよくとっています。一八七九年に東京学士会院（帝国学士院の前身、戦後は日本学士院と改称）で「漢学宜しく正則一科を設け少年秀才を選び清国に留学せしむべき論説」を発表し、それまでの漢学とは異なる、口頭で中国の読書人や外交官と交流・論弁することも出来る人材を育成し新しい漢学を樹立して欲しいと訴えたのです。そして、公文書の解説を重視した実証的ランケ史学を取り入れながら、それは五十年前の西洋に始まった新しい学問の伝統であり、それに類似した日本の考証学は百年前に、中国の考証学は二百年前にすでに存在していたのだ、と指摘して



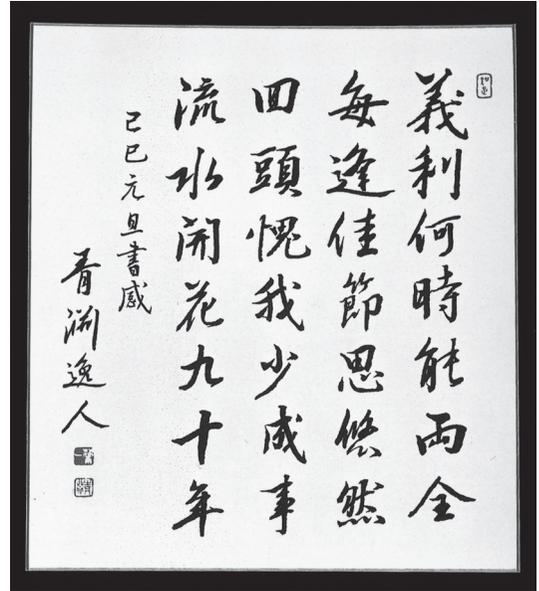
洪沢栄一の古希を祝う小山正太郎の絵画（1909）
 洪沢史料館提供

います。しかも、世界中の学問が遂に「帰納法」の一徹に帰したのは、「空論憶測では人が承知もせず、又それでは実用にも遠くなるから、事々物々、悉く証拠を取って考え合はすれば、縦令間違ったことがあっても直に分かる」と大所高所から近世世界の学問趨勢を観察していました。

以上のような安繹と敬宇の見解は、二松学舎を樹立する際の中洲の趣旨とよく通じていると思います。一八七八年、中洲が東京府庁に「私立漢学設立願」を提出し、「方今洋学盛行すと雖も、漢文以て其意を達するに非れば、経国の用に供する能わず、而して漢文に法あり、之を講習するに非ざれば又其意を達する能わず、是弊舎の設立する所以なり」と訴えていたのです。しかも、作成された漢詩に「千秋不易是彝倫 文物典章追世新 吾要公平折衷学 斟古酌古適经纶」という一首があり、漢学・洋学を折衷しようとしたその立場をよく表しています。

（三）義利合一を趣旨とした人生哲学——洪沢栄一との比較——

中洲は十歳年下の洪沢栄一とも多くの接点をもっていました。たとえば、一八八〇年代前半、二人は東京大学での同僚関係をもったこと、中洲が栄一の前室、すなわち亡き夫人（戒名宝光院・俗名千代）のために碑文を撰したこと、栄一が一九一〇年から「財団法人二松義会」の顧問、そして中洲逝去直後の一九一九年六月から「財団法人二松学舎」の舎長に就任したなどが挙げられます。しかし、二人の協力で生み出し、しかも後世に広く影響を及ぼしているものは、何と言っても「論語と算盤」という「道德経済合一」論を



卒寿を迎える浪沢栄一が書いた七絶詩（1929年）
浪沢史料館提供

象徴する重要なメタファーです。

中洲は早くも一八八六年東京学士会院で「義利合一論」を発表し、宋学の影響で利を説くことを潔しとしない世の中の因習的傾向に異を唱え、古代の中国では義利合一の説があったので、宋以降の利の扱い方は冤罪であると主張しました。この中洲の所論の重要性について、阪大で懷徳堂の朱子学に関する博論を書いた私にとってよく理解できます。天下の台所といわれる近世大坂に置かれ、町人学校の性格も有する懷徳堂の学者たちが直面する重要課題の一つはほかでもなく、いかに日常の商売による利得を正当化するかということでありました。五井蘭洲や中井竹山などは、結局、易經における「義者、利之和」という論理を持ち出しました。言い換えれば、彼らは、中洲と同じように古代儒教にすでにあった義利合一の説を根拠に自説を展開したのです。

栄一も少年時代から『論語』、『孟子』などを読んでいましたし、しかも自らの経営活動の体験からこの義利の問題について中洲と意気投合して、認識の一致を見たのです。にもかかわらず、「論語と算盤」説の最終的形成は、一九〇九年栄一の古希記念という契機を待たねばなりませんでした。同年、小山正太郎という画家が揮毫された古希祝賀の色紙には、四つ物が描かれています。積んでいる四冊の本は『論語』で、そのすぐ隣に算盤があり、パリ万博の時に被った紳士帽があり、武士の身分を象徴する刀もあります。栄一はもともと農家の生まれですが、幕末に最後の將軍慶喜から財政の手腕を買われて、武士の身分を与えられました。色紙に、「論語を礎として商事を営み、算盤を執て士道を説く。非常の人、非常の事、非常の功」と書かれていますので、この絵は、後の「論語と算盤」というメタファーの原型と言えるかもしれません。この

絵に感興を覚えた中洲は、「題論語算盤図賀澁澤男古稀」の一文を書き、「道德経済合一」論を象徴する「論語算盤」説がこれで確定されたと考えられます。いまや、栄一の『論語と算盤』は現代日本語訳・現代中国語訳をはじめ多くのバージョンが世界中に広がり、ビジネスマンと一般の人々に愛読されています。

しかし私は、中洲の「義理合一論」と栄一の「論語と算盤」説を単なる儒教由来の古典的テーマの現代版と狭く受け止めてくはない、むしろ、人間の営みにおける物心両面のバランス問題として理解したほうがよいと考えます。人間は、誰でも物質の利益を追求する欲望もあれば、人生の意義を追求する願望もある、そういうバランス感覚を多かれ少なかれ持っているはずです。ですから、ただ経済人・実業家に限らず、個々の人、全ての人が、次元の違いこそあれ、利と義のどちらを優先させるかという問題に出会う場合、選択を迫られるのです。この問題について、中洲は自撰の碑銘に次のような注目を働き回答を出しています。「毅（中洲の本名）、人ト為リ、野朴ニシテ修飾ヲ喜バズ、孔学ヲ奉シ、古今諸家ヲ折衷シ、最モ姚江（王陽明を指す）ヲ好ム、徒ニ授クルニハ、常ニ義理合一説ヲ唱へ、義ニ臨ンデ一步ヲ進メ、利ニ臨ンデ一步ヲ退ケバ、始テ能ク合一」と。バランスのよく取れた姿勢と言えましょう。

実は、「論語算盤」説が形成された明治末期に、帰一協会という思想宗教間の対話団体も栄一の尽力で出来ました。メンバーは成瀬仁蔵・井上哲次郎・姉崎正治などの日本人だけでなく、同志社のアメリカ人教師なども加わっていました。彼らがどんな問題を解決しようとしていたのかと言いますと、「帰一協会意見書」を見ればよく分かります。人類の学術や文明は大きな進歩を遂げていますが、諸宗教や思想の共通点をどうやって見出すか、いまだに未解決の課題です。ただ「人類の文明は、今後或る点に於て帰一の針路を執るに至るべし」というような展望と想定が示されています。

これはある意味で、現在にも通じる問題だと思えます。倫理問題を無視して過度な経済発展と技術進歩を追及することは危険であり、現に地球環境を破壊し、人類自身の存立地盤を脅かしているからです。経済発展の利益と環境保護の義理のどちらを優先させるべきかという問題は、もはや避けて通れない課題となったことは、最近パリで開催された国連の気候変動

枠組条約締結国会議で形成された初步的コンセンサスによっても分かるのです。

時間が長くなりましたが、これをもちましてわたくしの報告を終らせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

【質疑応答】

問1 なぜ、三島中洲に興味を抱かれたのですか。

答1 私が上海の復旦大学で書いた修士論文は、上海・長崎・横浜などを中心に幕末の日英関係を考察したものです。阪大の博士課程に入った時、ひきつづき外交史をやる場合、つねに東京に來なければならず、それは無理だと自覚しました。従って、史料の現地調達という考え方で、大阪大学図書館所蔵の懷徳堂文庫を使って学位論文を書きました。懷徳堂は、二松学舎のような漢学塾で、江戸時代に長く存続し、大正期に復活されて終戦まで続きました。現在、福沢諭吉を生んだ蘭学の適塾とともに阪大のルーツと認識されています。近世懷徳堂に関する学位論文を書いたため、近代の漢学塾や漢学者にも関心を持つようになり、八年前、『明治の漢学者と中国』という研究書を出しました。

しかも、いま勤めている関西大学のルーツである泊園書院は二松学舎と並んでは近代の二大漢学塾だといっても過言ではありません。明治期の末まで、西の泊園書院が約五千人の生徒を輩出したのに対して、東の二松学舎は七千人だと、もつと多いと言われます。江戸時代の盛況と比べて漢学の全体が凋落している明治期においては、漢学界に咲いた二つの大きな華でした。

問2 日本は韓国や中国からの文化的影響を受けてきたので、思想的には基盤を同じくしているはずなのに、中国はマルクス主義へ流れ、日本はそうではない。これはなぜでしょうか。

答2 中国のマルクス主義は、日本を経由して入ったものです。明治末期、片山潜や幸徳秋水などの影響を受けた中国人留

学生が、その学説を翻訳して祖国へ持ち込みました。そして、大正時代の河上肇も、同時代中国の社会主義者たちのなかでたいへんな人気を博しました。

中国人は最初、主として日本人の著作を通じてマルクス主義を理解していましたが、一九三〇年代末期から、コミンテルンの支部でもある中国共産党がコミンテルンの推賞した『ソ連共産党（ボルシェビキ）歴史小教程』を通じてマルクス主義を理解するようになります。これらの外来の影響のほかに、中国史上に形成された伝統的思惟傾向もその理解に影を落としました。それは、度重なる王朝更替を正当化する造反有理の理屈です。マルクス主義は、貧富の格差や人間の疎外化といった問題を生み出す資本主義のマイナス面を見事に捉えています。その視角は基本的に被支配者側に立つものです。中国史上に頻発する農民蜂起の論理とうまく合致する部分があるため、激動する近現代中国で受け入れやすかったのです。しかし、かといってすべての中国人がそれに賛成するわけでもないことが周知のとおりで、とくに改革開放後の中国では、その正当性に対する信仰が次第に薄まりつつあります。